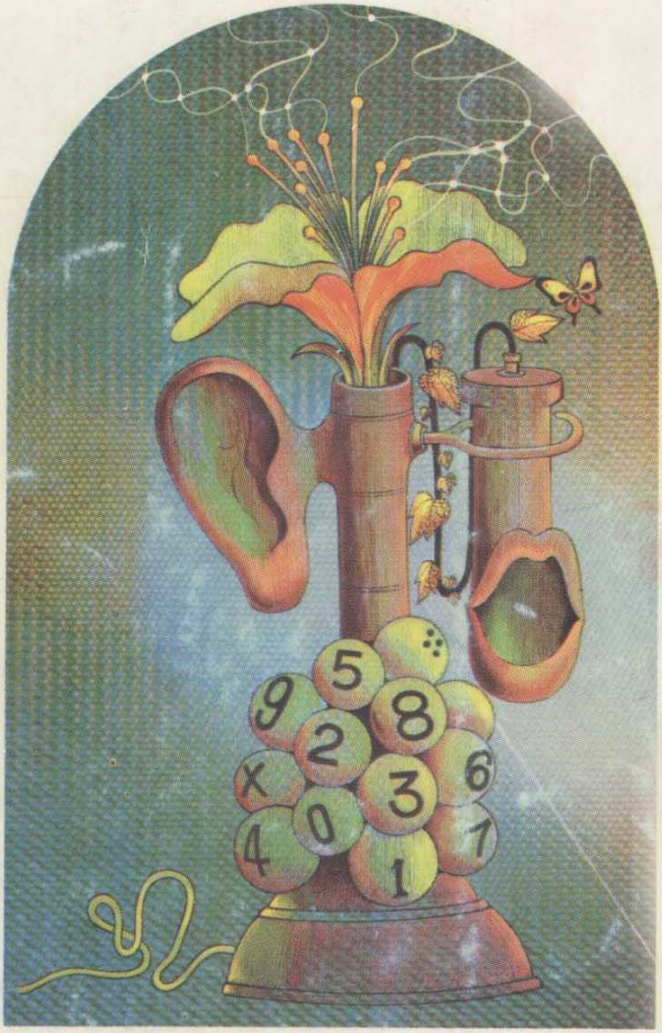
声の網

星 新一



声の網

星新一

発行者　野間省一
発行所　株式会社講談社
東京都文京区音羽2-12-21
電話　東京（03)945-1111(大代表)
振替　東京　8-3930
デザイン　亀倉雄策
製　版　豊国印刷株式会社
印　刷　豊国オフセット株式会社
製　本　株式会社国宝社

© Shinichi Hoshi 1973
Printed in Japan

定価はカバーに表示してあります。
（落丁本・乱丁本はおとりかえします）

海流の見える町

矢野栄蔵

目次

1 夜の事件 7
2 おしゃべり 27
3 家庭 47
4 ノアの子孫たち 67
5 亡霊 86
6 ある願望 106
7 重要な仕事 126
8 反射 144
9 反抗者たち 164
10 ある一日 183
11 ある仮定 202
12 四季の終り 221

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

解説の解説／加藤秀俊　238
年譜　246
さしえ／真鍋　博

声の網

1　夜の事件

一枚のガラスを境にして、冬と夏とがとなりあっていた。
いまは一月。ショーウインドウのそとでは、きびしい寒さをふくんだ風が走りまわっている。葉の落ちた街路樹の枝をふるわせ、公園の池の氷をひとなでごとに厚くし、時には薄い雲からのかすかな粉雪を仲間に加えたりもする。
しかし、店のなかの暖房はよくきいていた。ここは各国から輸入した民芸品を売る小さな店だ。たとえば、メキシコ産のあやつり人形がいくつかある。どこかユーモラスな表情の、ひげの濃い、むぎわら帽をかぶった男の人形。赤いスカートの女の人形。黄色、青、白、黒と原色が彩りをきそいあっている。
そばには木の実に緑色でとぼけた目鼻を描いた、まじないの道具ともみえる原始的な楽器がある。もし、この楽器がその秘めた力で音楽を響かせたら、人形たちは踊りはじめ、あたりはたちまち強烈な日光の熱帯になってしまいそうな感じだった。
そのほか、スペイン、ポルトガル、イタリー、インドなどの民芸品が並べられ、派手な色があたりにみちていた。温度だけでなく、店のなかはすみずみまで夏だった。べつにここは温かい地

方の品の専門店ではないのだが、冬になるとこれらの品がよく売れるのだった。人々は視覚のための暖房装置をも欲しがるからなのだろう。

この店はメロン・マンションの一階にあって通りに面していた。建物の正式の名は第六住宅地区のA号ビル。十二階建で、一階はこのようないくつかの商店になっているが、二階から上はすべて住居用に作られている。住宅地区用の標準型ビルだ。

だが、人間にとって数字やアルファベットだけの表示は味気ない。そこで、それぞれ愛称がつけられている。例をあげれば、少しはなれた第五住宅地区は花の名、第七地区は鳥の名、そして、この地区はくだものの名なのだ。

このとなりのB号ビルはパイナップル・マンションと呼ばれ黄色っぽくぬられており、ここメロン・マンションはいうまでもなくうすみどりだ。

ビルのむれにかこまれ、中央には公園をかねた広場があり、花壇、噴水のある池、それに高速地下鉄の駅への入口もある。居住者の多くは毎朝この入口からはいって都心へつとめに出かけ、夕方にはまた、それぞれの建物のなかの自分の室へともどってくる。

もっとも、このところは冬の季節なので花壇に草花の生気はなく、噴水もとまっていた。また、いまの時刻は夕方。ひとしきり帰宅の人々の流れが通りすぎると、散歩する人影もない。薄暗くなるのも早かった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

この民芸品の店の主人は、六十歳ぐらいの男。中年の婦人客の相手をしていた。女客はあれこれ迷ったあげく、陶器の壺のようなものを指さして聞いた。

「これはなんなの」

「スペイン産の水飲み壺でございます。ボティーホという名のものでございます」

「ふくらみのぐあいが素朴でいいわね。もっとくわしい説明をうかがいたいわ」

「かしこまりました」

主人は店の一隅の台の上の電話機に歩みより、番号ボタンをいくつかつづけて押した。それから、電話機の横のボタンのひとつを押す。すると、店の壁にはめこまれたスピーカーから、若い女の声による説明が流れはじめる。

〈ボティーホはスペインのアンダルシア地方で作られております。この地はアフリカに近く、古くはアフリカからイベリア族がここに移住して国を作り、その後フェニキア人が、つづいてカルタゴがその支配をうばい、またジプシーが訪れ……〉

その地の歴史から風土へと説明がつづく。この声は民芸品輸入組合協会の本部から送られてくるものだ。そこへの電話番号をボタンで押し、さらに商品の番号を押す。そこのコンピューターはそれに応じ、ただちに録音テープの声を送りかえしてくれるのだ。うろおぼえや知ったかぶりのあやふやさは、どの店からもなくなっている。

スピーカーで拡大されたその説明には、ギターによるスペインの民謡のメロディーが加わった。哀愁をおびながらも明るい、情熱のこもったリズム。

〈……これをお部屋の棚にさりげなくお飾りになったらいかがでしょう。エキゾチックなムードが発散し、静かにひろがり、あなたの胸のなかに、やすらぎと楽しさをもたらすことでございましょう。また、ご来客のかたの目には……〉

お客の心のなかに買いたいとの欲求をめばえさせ、それを巧みに育てあげるような口調だった。中年の婦人客の目は品物にひきつけられ、ついにそれを手にした。

「これをいただくことにするわ」

「ありがとうございます。お持ち帰りになりますか。それとも、のちほどお届けいたしましょうか」

「包んでちょうだい。持っていくわ。うちはイチゴ・マンションだから、歩いてすぐなのよ」

女客は金を払い、品物をかかえて店から出ていった。

そのあと一時間ほど、店にお客はなかった。主人は品物の並べかえなどをしたあと、つぶやいた。

「きょうはそろそろ、店じまいとするかな……」

彼は電話の番号ボタンを押す。呼び出し音が終わり、受話器の奥で「どうぞ」という声を聞くと、そばのボタンを押す。レジスターが軽い金属音をたて、きょうの売上を記録した伝票テープをまわしはじめた。

「これで経理センターにあるわたしのファイルに、営業の記録が整理される。むかしにくらべ便利になったものだ。品物の補充も自動的に注文してくれるし、しかも、まちがいがない……」

伝票テープは動きをとめ、それと同時に電話は自動的に切れた。主人はボタンを押しなおした。こんどは組合協会の本部につながる。最近の流行の変化についての情報を知りたいと思ったのだ。それへの番号を押すと、テープが男の声を送ってきた。

〈このところ、東アフリカ、アラブなどの品の動きがいいようです。店の飾りつけは、それらに重点をお置きになるといいでしょう。照明は少し黄色みをおびたものになさると一段と効果があります……〉

主人はうなずいていたが、電話を切り、手で腹のあたりを押さえながらひとりごとを言った。

「品物の並べかえはあすにでもしよう。なんだか腹ぐあいが変で、気分がすぐれない。ひとつ診察をしてもらうかな」

また、電話機のボタンに指をあて、べつな番号を押した。応答がある。女の声だ。

「はい、第六地区病院でございます。保険番号をどうぞ……」

主人はそれを告げてから言った。

「じつは、腹のぐあいが悪いのです」

「それはいけませんね。では、お答え下さい。いつからです……。きのうからの食事をおっしゃって下さい……。痛みは……。便通のぐあいは……。はい、熱と脈とをはからせていただきます」

主人は電話台の横のいくつものボタンのうちのひとつを押し、台から診察器を出し、自分のからだに当てた。電子的な装置で体温がはかられ、脈も測定され、それは病院へと送信された。

ボタンを押しなおすと、通話はもとにもどった。女の声が指示を読む。
「コンピューターによる診断の結果を申しあげます。たいした症状ではなく、ご心配なさることはございません。ただの消化不良でございましょう。食後には消化剤をお飲み下さい。もし、一週間たって、それでも異常がつづくようでしたら、病院までおいで下さい。くわしい診察をいたします……」
「ありがとう。いちおう安心したよ」
主人は電話を切った。彼の表情ははれやかなものになった。元気づいた動作で立ちあがり、金庫をあけ、きょうの売上をしまいにかかった。

その時、電話のベルが鳴った。彼は金庫の扉を手早くしめ、受話器をとる。
「はい、こちらはメロン・マンション一階の民芸品の店でございます」
しかし、電話の相手はしばらく声を出さなかった。まちがいかなと思いながら、主人が「もしもし」と二度くりかえすと、やっと言った。
「お知らせする。まもなく、そちらの店に強盗が入る……」
低い男の声。主人はあわてて聞きかえす。
「なんですって。つまらない冗談はやめて下さい。いったい、あなたはどなたです。なんでそんなことを……」
だが、相手はもはやなにも言わなかった。やがて、電話はむこうから切れた。それで終わり

だった。主人は受話器をおき、ちょっと不快そうな声を出す。

「いまのはなんだ。われわれの知らぬ間にも科学は飛躍しつづけている。だが、いくら進んだからといって、そんな犯罪の予報までできるわけがない。悪ふざけだ。酔っぱらいか、テレビに熱をあげすぎたどこかの子供の……」

彼は首を振った。忘れてしまおうとしたのだ。しかし、首を傾けたままの姿勢で、そのまま動きをとめた。いまの自分の言葉で気がついたのだ。

あれは酒に酔った声ではなかった。子供っぽい声でもなかった。また、よく思いかえしてみると、他人を驚かしてひそかに楽しむ、病的な性格の感じられる声でもなかった。でたらめでない、なにか裏付けのあるような口調だったのだ。

だが、それにしてもなぜここへ。まちがいかもしれない。しかし、この仮定も、すぐに崩れた。こっちで民芸品の店とはっきり告げたあとで相手が言ったのだから。

店の主人は腕を組んだ。どうしたものだろう。このことを警察へ連絡しておこうか。彼は電話機へ手をのばしかけたが、六十歳という年齢にふさわしい分別ある動作で、それをやめた。とても信じてもらえそうにない。話したところで笑われるのがおちだ。返事の文句さえ想像できる。犯罪の予測が正確にできるようになれば、警察などいらなくなるでしょう、と言われるにきまっている。ひとさわがせなと、怒られるかもしれない。

彼は残念がった。すぐ録音用のボタンを押し、いまの声を記録しておけばよかった。それなら嘘でない証拠になる。それをもとに、警察は相手を割り出してくれるかもしれなかったのだ。し

かし、いまさら後悔しても手おくれだった。

「まあ、仕方ない。こんな妙な日は、すぐ店を閉めて帰ったほうがいいのだろう。そして、食事をしながら少し酒を飲み、ゆっくり眠るとしよう」

彼はショーウインドウの内側のボタンを押した。かすかな金属の音をたてながら、そとのシャッターがおりてくる。また、壁のスイッチを押すと、それにつれて店の照明が消えていった。はなやかな南国の品物たちは、薄暗さのなかに沈んでいった。

その時、店の入口のガラス戸が開いた。つめたいそとの空気が少し流れこみ、だれかが入ってきた。主人はそのけはいを感じながら、小さなランプひとつの暗さのなかで言う。

「いらっしゃいませ。しかし、きょうはもう店じまいでございます。できましたら、あしたおいでいただければと思います」

「いや、買物に来たのではないんだ……」

と、入ってきた人物が言う。主人は聞きかえした。

「で、どんなご用でしょう。ご注文でしたらうけたまわっておきます」

「そんなことではない。金庫をあけて、なかのものを渡してもらおう。さあ、早くしろ。ぼくはナイフを持っている……」

主人は目をこらして相手を見た。暗くてよくはわからなかったが、青年のように思えた。声や言葉つきからみて、どうやら単純そうな性格のようだった。長いあいだ商売をやっていると、それくらいの見当はつく。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com